

知事と県民の意見交換会（秋田地域振興局）議事要旨

- テーマ：魅力ある農業経営の実現に向けて～次代を担う若手農業者からの提言～
- 日時：令和元年7月10日（水）14：30～17：00
- 場所：秋田市河辺市民サービスセンター 会議室

視察

※寿牧場を視察

知事挨拶

本日は暑い中、また、御多忙の中の参加に感謝する。「知事と県民の意見交換会」は本日で今年度の6回目を迎えたが、以前の知事の時代からこの活動を継続している。

知事が地域に出向いて話をすると、市町村長や農協の組合長、観光協会の会長などからの陳情や要望の話が多くなるが、制度の運用や中身のことは、現場の人でなければ分からない。特に私が技術系の出身であることもあり、地域で実際に汗を流している人たちから、日頃考えていることや悩み、課題、夢などのお話を直接聞きたいと思っている。その中で、県内のどの地域でも同じような意見が出るものは県全体の課題であるだろうし、一方で地域特有の課題もあると思う。様々な課題に対して、県、市町村による取組や、場合によっては国への陳情などを行っていききたい。わずかな時間だが、皆さんからお話を聞いて勉強をしたいので自由に発言してほしい。

参加者自己紹介

（D氏）

平成28年4月に農事組合法人を立ち上げ、地区の4名の構成員と1名の従業員の計5名で経営している。経営面積は水稻49ha、ネギ1.4ha、大豆1.3haで中規模な農業法人だと思う。現在、クボタで進めているICTのほ場管理システムを導入しており、GPSを使って自分がどこにいてどのような作業をしているのかを監視し、少ない人数で無駄なく作業を行っている。求人をしているがなかなか人が集まらないのが悩みだが、自分の住む地域が農業に対して前向きであるということを発信していきたい。

（E氏）

農水省の「農の雇用事業」を活用し、平成24年から当農業法人に就農した。法人内で2年間研修をした後、エダマメ部門の担当リーダーを2年間務め、平成28年から水稻とエダマメ部門の総括担当として事業に取り組んできた。前代表の方針により、平成30年より自身が代表に就任している。若手3名とともに、GPSを活用したICTシステムやGAP（農業生産工程管理）を取り入れ、日々の農作業や日報のやりとりを行っている。

（F氏）

地域で農業の研修を受けた後、3年前の平成28年より独立し、個人で農業経営を行っている。ミニトマトから始め、現在はトルコギキョウを主体とし、様々な露地野菜を一人で

栽培しているが、繁忙期はアルバイトを雇ったり福祉施設からお手伝いに来てもらって簡単な作業のフォローをしてもらっている。この先、法人化をして人を雇うかどうか悩んでいる。

（A氏）

見学してもらった牧場で肥育牛を600頭、少し離れたところにも牛舎があり繁殖牛17頭で経営を行っている。

（B氏）

果樹農家の娘として生まれ、平成12年に農家民宿をオープンさせた。日本ナシが主体で140a。夫と母と自分で果樹経営をしており娘が1人いる。研修生の受入れも行い自身の園地で研修をしてもらった。今後娘に継がせるか、果樹農家に興味がある研修生などに園地を継いでもらうのがよいのかどうか課題と感じている。

（C氏）

父の代からキク類の栽培を行っている。自分が大学から戻ってすぐに就農・法人化し、今年から自分が代表取締役となった。また、男鹿・潟上園芸メガ団地に参加しキクの組合長に就任している。メガ団地では生産者が9名、露地キクの栽培が5haに増えており、今年から国のスマート農業事業に参画している。キクの需要期に合った効率的な栽培を目指す取組を行っている。

意見交換

（局長）

本日のテーマである「魅力ある農業経営の実現」のために、日頃考えていることや目指しているところについて、お話しいただきたい。

（D氏）

ICTシステムの「KSAS」を活用している。携帯・パソコン・タブレットの端末上で、行っている作業の一覧や日誌などの登録が可能であり、今どこで誰が何をしているのかを把握することができる。また、「KSAS」に対応した農機具もあり、今後自動運転等で指定したほ場での田植なども可能となるだろう。

このほか、田んぼの「水管理」アプリケーションのモニターに参加している。水田だけで東西10kmほど離れている農地もあるため、導入により現地に行かなくとも水量を調整できるメリットは大きい。人口や農業人口が減少している中で機械に頼らざるを得ない状況が続くが、これらのICTの導入は省力化につながっている。楽な農業を目指したい。

今後ドローンの導入も必要と考えているが、1台200～300万円くらいかかる。国庫補助事業があることは承知しているが、本体だけでなく技能認定（資格）取得など、県レベルでも支援があるとありがたい。また、中山間地の農地は階段状となっており作業効率が悪い。基盤整備事業は事業構想から準備などを含め5年以上かかるが、もう少し短期間で事業が進むとありがたい。

（E氏）

2年前にGAPを取得し、農作業の仕方、営農計画、機械の使い方をマニュアル化した。また、Dさんのシステムと似ているが、「アグリノート」というICTを導入しており、150箇

所ほどあるほ場に間違わずに行くことができるようになったり、作業指示をアプリケーション上で行うことができ、便利になった。現在は朝礼と終了後のミーティングを行っているが、今後はアプリ上で作業指示を出し、朝礼をせずに直接ほ場に行き作業するなどの省力化も考えている。

（F氏）

トルコギキョウをメインに一人で作業を行っている。まだ自分も勉強中であり経営が安定していないことと、ほ場が五城目町の端の方に位置しているため、なかなか人を雇えないことが課題。まずは、現在のほ場と施設の中で、効果的に生産を上げていくことが目標。

（A氏）

施設見学をしていただいたように、自動給餌器や稲わらカッターの活用で省力化にはなっているが、牛の病気の治療や出荷作業、堆肥作業、冬場の除雪など人手が必要な作業もあるため、自分と妻の2人では人手不足となっている。牛舎は3棟あるため一人が1棟を受け持ち、自分が全体を見渡せるような体制が理想。人手が増えた際には増棟も検討したい。

（B氏）

自分自身、楽しみながら果樹の仕事をしている。夫は建設業から果樹農家に転職したが、「建設業をしていた際は工期に追われていたが、果樹は自分の好きなように楽しみながらできるのがよい。これでもう少し収入がよければもっと楽しい。」と言っている。農家を見てもらいたい・体験してもらいたいという思いで農家民宿を建てたが、ようやく今年、支払いが終わったのでこれから自分がやりたいことをやっていきたい。自分たち家族も周辺の農家も高齢化や後継者が課題。必ずしも自分の娘に後を継いでもらわなくても、受け入れた研修生などが園地を受け継いでいく方法もあるのではないかと考えている。

（C氏）

法人化し、人を雇用していった際に、元々あった園地の規模だと手狭だったこともあり園芸メガ団地に参画した。立ち上げの際は6人中4人が新規就農者だったが、メガ団地で農地を集約したことで、新規就農者であっても初年度から既存農家の倍以上の露地栽培面積を担当したが、経験者の技術指導などを受けやすい環境があったので、初年度からある程度の結果を出せた。「販売額1億円以上」という目標を達成し、県にもメガ団地をやってよかったなと言ってもらえるようにしたいと思っている。人手不足といわれているが、地域の担い手をメガ団地が受け入れ、技術指導し育てていけるような環境を目指している。

キク栽培も人手が必要な作業だが、人手不足の中、機械化が必要なので国のスマート農業に参画し、ICTによるほ場管理や、夜間のキクの電照がついたかどうかをモニタリングするシステムの試験をメガ団地で行っている。国の中間調査結果も良好だったのでこれからのキク作りに生かしていきたい。

（知事）

思いのほか、ICTやスマート農業が普及し始めていることを実感した。これからのスマート農業は、人手が少ない中で必要な機械を入れて生産効率を上げ、しっかり利益を上げていかなければならない。一方で、場所や品目によっては、地域の中で特色のあるものを作り、農福連携をするなど、地域に貢献しながらコミュニティの中で農業を続けていく方

法もある。また、農業で生計を立て、従業員を通年雇用とした際は、冬期間は加工や六次産業を行うなどの工夫も必要。

前日、肥料散布のドローン製作などを手がける大館市の東光鉄工を訪問した。ドローンはもっと安価になり、汎用性も高まると思うが、農協単位でまとめて購入したりリース制度を行うともっと導入しやすいのではないかな。

皆さんは若さを生かしていろいろなことにチャレンジしている。ICTは農業が一番向いていると思うので、是非使いこなしてほしい。ただし、ICTが最初に導入された製造業では導入に経費がかかり経費倒れすることもあった。本当に必要なソフトを見極めることも大事。簡単ではないが秋田県でソフトを開発しても面白いかもしれない。

ほ場整備もしっかりやっていかないといけないが、中山間地で作られるものは「丁寧に作られている良いもの」であるイメージもあり、高値で売っていくことも大切だろう。農業もブランドと同じでハイブランド品と量産品の両極端で中間がない。

（局長）

続いて、今後、農業を志す人を増やしていくにはどうすればよいのか、どのような環境づくりが必要なのかについて、皆さんからお話しいただきたい。

（B氏）

果樹をやってみたい人は多いが、園地を貸してもらえなかったり、新規で始めた際は未収入期間の生活が不安という声もあるので、支援制度があれば研修生に勧めやすくなる。また、大前提として農業が楽しい・良い仕事だということをPRしていかないといけない。

後継者はいるが、園地が狭く・古くなっている状態では継がせられないため、果樹の改植をしたいが、その間の収入がなくなってしまうことへの不安もあると聞く。国の支援制度では未収益期間の補償がある制度もあるが、秋田では要件に合致しないこともあるので、うまく活用できれば園地を広げ、改植し、後継者に継がせることができるのではないかな。

果樹は高齢のためにできなくなる作物ではないので、早期退職等で趣味と実益を兼ねて60代くらいから農業を始める方法もあるのではないかな。

（知事）

商業であれば、仕入れができなくなってしまうなど、自分の力以外の部分で連携が切れると経営ができず倒産してしまうこともあるが、農家は自分の土地で生み出すという点で強い。知人でも退職後、60歳を過ぎてから農業を始めた人もおり、このような人たちの活用もひとつの方法。

（D氏）

フルタイムの正規雇用ではなく、コンビニエンスストアのアルバイトのように10～20人の登録制で各々の都合の良い時間で働いてもらう体制が取れないかと考えている。農業の各作業は草取りなど簡単なものが多いので、子育て中のお母さんやおじいさん・おばあさんのお小遣い稼ぎで働いてもらい、人手不足の解消につながれると理想。

自分は31歳のときに父が急死し、農業をやらざるを得ない状況となり就農した。農家の中には子どもに農業を継がせるつもりもない人も多いが、土地や水管理などハード面での課題があることも理由にあるようだ。中山間地の段差をすぐに解消するのは難しいが、水管理の部分など、使いやすい状況を作り上げていく必要があるのではないかな。

（C氏）

法人化していると国や県の雇用対策支援制度の利用がしやすくなり、研修生受入れの話をよくいただくため、聞こえが悪いが研修生を労働力のひとつとして受入れを行っている。人手が増えると大変重宝するので、研修生には働きながら技術を盗んでもらい独立してもらおうという流れができてきており、法人化のメリットを感じている。

メガ団地では、それぞれの経営者がいて機械の共同利用をしている形を取っているが、共同利用することで新規就農した人にとっては初期投資がほぼかからないという点が大きなメリットとなっている。

キクの収穫後は、下葉を取り長さをそろえ、結束・箱詰めするという「選花」の作業があるが、メガ団地で「共同選花場」を設けることができれば、農家はキクの栽培・収穫だけに専念できて作業効率が上がるし、地域でも雇用が生まれ、理想の形になると思う。また、周辺地域ではメロンや米の栽培もあるが、新規就農者が市役所に相談に行くと、キク栽培を勧められる。地域で選択肢が少ないので、キクに集約される形だが、生産者が増え、その中で技術指導もできるので良い流れになっている。

去年は彼岸時期の露地キクが台風の塩害で甚大な被害を受け、約7千万円の売上げだったが、今年は1億円を目指しており達成する予定。

（知事）

資材や経費・人件費を考慮すると、自然が作る「農業」の1億円は、様々な行程でコストが発生する「製造業・工業」の3倍の3億円くらいに匹敵している。

（E氏）

農業と全く関わりのなかった新入社員に話を聞くと、農業は「汚い・きつい」というイメージがあったようだが、今はトラクターやコンバインを使い機械を中心に農作業を行うため、そのようなイメージを感じていないようだ。新入社員には、やる気とやりがいを見つけてほしいと思っているが、そのためには休日の確保が課題。交代で休みは取っているが、なかなか連続した休みを取ることができていない。

（知事）

農業に限らず、今の若い方は就職の条件として給料よりも休みを重視する傾向があるようだ。東京では家賃が高いので、特に秋田で親元と同居している人はかなりが良い暮らしをしているのではないかな。

（C氏）

秋田の田舎暮らしは満足度が高い。もっとアピールできるとよいと思う。

（知事）

Fさんの農福連携はどうか。

（F氏）

農福連携の福祉事業所は、たまたま友人を通じて紹介してもらった。園地に先生と一緒に来てもらい、先生も一緒に作業を行うが、人によってできる作業やできない作業があるので難しい面もある。

(知事)

Bさんの農家民宿はどうか。

(B氏)

農家民宿は一棟貸切りのような形で運営しており80坪程度の面積。最初の頃は自分で作った料理を提供していたが、そうすると自分の農作業への影響もあるため、最近は宿泊者に自炊をしてもらっている。

(知事)

ドイツのロマンチック街道に行くと、農家民宿がたくさんあり通常のホテルより高いものもある。管理人は不在で宿泊者は自炊する。近所に食材の販売もあり、共稼ぎの都心部の人たちが休暇で自炊を楽しんだりしているようだ。アメリカの場合は、民宿やコテージも豊富。冷蔵庫に食材が用意されているほか、洗濯機や掃除機もあり人手をかけずに楽しんでいる。農家民宿は農家によるおもてなしという面もよいが世界標準で見るとそうでもなく、自炊も多い。

(A氏)

畜産農家は、実家が畜産の人で親元就農がほとんどである。新規で畜産や牛農家をやりたいという人は聞いたことがない。新規の畜産農家を増やすためにも、もっと牛と触れ合う機会があれば、と考えている。2年前、宮城県で開催された全国共進会で、高校生が出品していたことがあった。この会に立ち向かえるのはすごいと思う。20年ほど前になるが出身高の金足農業高校で繁殖牛は2頭いたが、肥育はしていない。育てて食べるころまで勉強すれば、牛農家を目指す人が人も増えるのではないか。そのような環境づくりができることを期待したい。

(知事)

松阪牛の三重県や神戸牛の兵庫県は畜産が県の特産品であり地域で誇りを持っている。秋田は、米にはプライドを持っているものの、畜産にはあまりプライドを持っていなかったが、ようやく芽生え始めているところだと思う。

高校には繁殖牛しかいないとのことだが、肥育牛をやって中学生が実業高校にインターンシップに来ると面白いかもしれない。教育委員会にも話したい。先進的な牧場を見せると畜産業に対する見方も変わるだろう。由利工業高校では航空機産業人材の育成のための航空機コースがある。それと同じように、秋田牛の人材を育てるためのコースがあってもよいかもしれない。

水稻品種はどのようなものを作っているか。

(D氏)

「あきたこまち」が6割。残りは加工用もち米のほか、「しきゆたか」など遅い時期に刈り取る業務用品種などを直播きで栽培し、収穫時期を分散している。業務用のお米には業務用の品種が求められている。

(知事)

業務用のお米が増えていて家庭用が減っているようだ。炊飯器がなくなってくるのでは。レトルトごはんパックでも、品種ごとに様々販売されており食味もよいという。あきたこ

まちは標準品の中で一番安定しており長持ちする品種だと思う。ブランド米は栽培管理が難しいものもあり、少し売れなくなると採算が取れなくなる。

日本ナシの品種はどうか。

（B氏）

幸水が多いがJA湖東では「あきづき」に力を入れている。価格を維持するため、なるべく直売で売るようにしている。あまり日持ちしないので、採ったら売るを心がけている。

（知事）

ナシにも、小さくてもおいしい品種があっても良いように思う。お菓子は全部小さくなっている。昔は大きいものが豊かだったが、野菜でもミニトマトや小さいものにも豊かさがある。

（C氏）

キクの生産量は愛知県と沖縄県のシェアが大きい。しかし、需要期となるお盆、秋彼岸の時期は、これら暖地産の品質が不安定になりがちである。この時期の市場からの東北産、秋田産のキクに対する期待は大きくなってきている。沖縄と東北・秋田でリレー出荷できるような流通体系ができることが望ましい。

今、秋田では花き栽培に参入する人も増え、メガ団地の仕組みもできてきている。この強みを生かし、県でもキクのPRや売り方に力を入れてほしい。

キクはお盆の時期の需要が最も高く、約30%を占めている。売り方やPRに力を入れれば秋田ではまだまだ伸びる品目であり、利益を出していくことで新規参入者の呼び込みも図れると考える。一方で、県のキクの会の役員もやっているが、段ボールの不統一など、まだまだ課題は多い。

（知事）

とても良いアイデアを教えていただいた。県内の農協のネットワークなども考えていかなければならない。日本から海外に輸出している作物を現地で見ると、北海道や千葉は統一された段ボールで出荷されているが、秋田は箱のデザインが全部違う。昔からの取引先があるので簡単にはいかないが、統一化することでコストも安く済む。量があると輸送費が押さえられるため採算が取れる。

知事総括

皆さんには悩みや課題がたくさんあると思うが、前向きに取り組んでいる声を聞くことができ、秋田の農業には希望があると感じた。農業は数字の上では製造業には負けているが、秋田の原風景は農村であり、農業が秋田の原点にあると思っている。確かに人口減少が進んでいるが、農業の基盤があるうちは、秋田がなくなることはない。今後、世界的には人口爆発や異常気象、砂漠化などが進み、最終的には食糧不足になるだろう。そのときに、一番強いのは食料を供給することができる場所であり、日本が危機的な状況になると、秋田の農業は日本を支える役目もあり豊かになるだろう。これから、市町村や農業団体と一緒に頑張っていくので、皆さんも希望を持っていただきたい。また、問題意識を持っていただき、行政に対する意見や要望があればお伝えいただきたい。（了）